

17. 中学校の柔道授業における指導方法に関する研究

—学習ノート使用・男女共習授業の実践から—

和歌山大学	矢野	勝
東京学芸大学	貝瀬	輝夫
関東学園大学	高橋	進
和歌山大学附属中学校	南	良和
朝日中学校	南茂	英夫
青山学院高等部	平野	武士
講道館	藤田	真郎

17. A Study of *Judo* Instruction in Junior High School: Using the *Judo* Instruction Note in the Process of Teaching *Judo* and the Effects of Coeducation

Suguru Yano (Wakayama University)
 Teruo Kaise (Tokyo Gakugei University)
 Susumu Takahashi (Kanto Gakuen University)
 Yoshikazu Minami (Junior High School affiliated to Wakayama University)
 Hideo Nanmo (Asahi Junior High School)
 Takeshi Hirano (Aoyama Gakuin High School)
 Shinro Fujita (Kodokan)

Abstract

The purpose of this study was to investigate the effect of using the *Judo* Instruction Note, and the effect of coeducation in junior high school classes. The subjects were freshmen who had never learned *judo*. In one class, boys were taught with the aid of the *Judo* Instruction

Note, and in another class, boys were taught without the note. Both boys and girls were taught together in another two classes. The attitude towards *judo* was measured by the use of a questionnaire prepared by Takahashi, administered at the beginning and end of the first semester. The data were analyzed by factor analysis techniques. Factor scores were compared to assess any change in attitude towards *judo*. The sum score in each item of each group was compared by t-Test. The results were:

1. Six attitude factors were extracted by factor analysis. These factors were similar to the result of a previous Takahashi study.
2. The most important reason for a positive change in subject's attitude was attending a *judo* class, whether-or-not the *Judo* Instructional Note was utilized.
3. Class assessments made it clear that the effective use of the *Judo* Instruction Note helped in the understanding of *judo* technique.
4. Junior high school girls evaluated *judo* highly on factors like brightness, and refreshment. It was also indicated that *judo* classes for high school girls were suitable.
5. The attitude of boys in coeducational classes changed in a desirable direction, and their assessment of the *judo* class was higher than that of the all boy's class.
6. Coeducational *judo* classes for junior high school freshmen are effective, and a primary goal for success is making learning objectives clear.

1. 緒言

平成元年の学習指導要領改訂で体育について「生涯体育・スポーツと体力向上とを重視する観点から、生徒が自ら進んで運動に親しむ態度や能力を身に付け、心身を鍛えることができるよう、生徒の心身の発達の特性と運動の特性との関連を考慮して内容の改善を図る」とされている。言い換えれば、現在の学校体育においては、生涯体育の展望に立ち自主的、自発的な運動の実践ができることを主眼としていると言えよう。さらに、平成5年度からいよいよ本格的に展開された中学校新学習指導要領において柔道は、学校体育のなかで「武道」という領域に存在し、今までは男子だけに履修が認められていたが、女子においても履修可能になっている。これらを受けて、中学校の柔道授業研究においても生徒が主体的に活動できる柔道指導というテーマでの実践研究報告⁷⁾⁸⁾¹⁰⁾や女子の柔道授業に関する調査研究¹⁾⁶⁾¹⁷⁾が後を絶たない。しかし、それらの報告は、指導による効果を科学的に分析したものではなく、授業者の授業過程での工夫や印象を主観的あるいは抽象的に報告されているに過ぎない。

一方、これまで柔道に対する意識についての研究¹¹⁾¹²⁾¹³⁾¹⁷⁾では、心身鍛練効果への価値認識は高いにも拘らず、感情的側面への評価は否定的・逃避的傾向にあり、柔道に対する意識を高める必要性が問題にされている。この問題に対して、高橋ら¹³⁾は、柔道に対する非好意的な認識を改善させる為には、指導者の充実・指導方法の工夫が重要な要因であると述べている。しかしながら、具体的な指導方法における学習効果、特に中学生を対象とした柔道授業における指導方法の差異による学習効果を客観的・科学的に捉え研究報告されているものはほとんど例を見ない。

そこで、本研究では前述したような問題意識からこれから求められていると思われる主体的に学習できる柔道授業をめざし、さらに今日の体育科教育研究²⁾で重要とされている「できる」という技能習熟だけに留まらない「わかる」という技術認識を学習できる方法として有効と思われる

学習ノートを使用した柔道授業を取り上げた。また、生涯体育・スポーツの考えに基づく選択制の実施・カリキュラム問題等と、女子における柔道選択が可能になったことで、採用される可能性のある男女共習の柔道授業に関しても取り上げた。そして、それぞれの指導方法のもとで中学校1年生の初心者を対象とする基本的な柔道授業を14時間実施し、授業前後の柔道に対する態度変容ならびに毎時間の生徒の授業評価から、中学校の柔道授業における学習ノート使用の効果・男女共習授業の可能性について分析検討を試みようとしたものである。このような研究を進めることはこれからの、中学校の柔道授業における効果的指導方法を確立していくうえで、深い意義があると考えられる。

II. 研究方法

- 1) 調査対象：W中学校1年生男子80名（学習ノート使用における授業）。
W中学校1年生男子38名・女子40名（男女共習授業）。
- 2) 実験時期：1991年1月～2月（学習ノート使用における授業）。
1992年9月～11月（男女共習授業）。
- 3) 授業者：柔道は無段者ではあるが教育経験10年を越え、研究授業を幾度も経験しているベテラン教師であった。
- 4) 授業の手順

【学習ノート使用における授業】

①学習ノート使用クラス40名(以下、実験群とする)、未使用クラス40名(以下、対照群とする)にわけ柔道の授業を14時間実施した。②使用した学習ノートは、あすろ出版の柔道学習ノートを用いた。授業実施時間を同じくするためできるだけ授業中に、学習ノートに関連した箇所への記入を行わせた。③学習内容は、柔道の初心者を対象とする基本的なものであった。主な技能面での学習内容は1～4限で基本動作(後ろ受け身・横受け身・前回り受け身)、5～7限で、対人的機能投げ技(膝車・支え釣り込み足・大腰)8～11限で対人的技能固め技(袈裟固め・横四方固め)12～14限、テスト・まとめといった学習内容であった。④授業形態は、主に一斉指導のもとに新しい技術を学習した後、グループ学習を行った。

【男女共習授業】

①男女共習授業で男子20名女子20名、男子18名女子20名の2クラス(以下、共習群とする)の授業を行った。②共習授業との比較に男女別習授業として、前年度の学習ノート未使用クラスを別習群とした。③学習内容は初心者を対象とする基本的なもので、14時間実施した。内容は、基本動作(後ろ受け身・横受け身)、対人的技能投げ技(膝車・支え釣り込み足)固め技(袈裟固め)であった。④授業形態は、基本的に男女共習のもとで、主に一斉指導のもとに新しい技術を学習した後、グループ学習を行った。但し、男女共習の方法を柔軟に解釈し、また今回の研究では授業を容易に進められるよう男女で直接組合うことを無理には行わなかった。しかし、グループ学習の際には、男女一緒のグループをとった。

5) 態度変容：授業実施前・後のそれぞれで高橋進作成の柔道に対する態度に関する30項目の質問紙(「柔道についてあなたはどのように感じますか」という問に対して肯定的・否定的感情の側面から15項目、「柔道を行うことでどのような身体的効果が期待されると思いますか」という問に対して5項目、「柔道を行うことでどのような精神的効果が期待されると思いますか」という問に対して10項目からなっている)を用いて意識調査を行った。

6) 生徒による授業評価：高橋健夫作成の9項目に関する調査表を使用し毎時間授業終了後に

アンケート調査によって実施した。その質問内容は、

- ① (精一杯の運動) 精一杯、一生懸命運動することができましたか
 - ② (技や力の伸び) わざや力を伸ばすことができましたか
 - ③ (新しい発見) 「あっ、わかった」とか「ああ、そうか」と思ったことがありましたか
 - ④ (仲間関係) 班またはクラスの人達と力を合わせて仲良く勉強することができましたか
 - ⑤ (楽しさ) 今日の体育は楽しかったですか
 - ⑥ (学習の目当て) 自分のめあてももって、体育の授業をすることができましたか
 - ⑦ (自主的学習態度) 自分から進んで、体育の勉強をすることができましたか
 - ⑧ (課題の困難度) 今日勉強したことは難しかったですか
 - ⑨ (準備・後片付け) 体育の授業の用意や後片付けが、テキパキとできましたか
- の9項目であった。

意識調査・授業評価それぞれの質問に四件法で回答を求め、非常に感じる4点、感じる3点、感じない2点、全く感じない1点の得点を与えた。

7) 分析方法

表1. Varimax 回転後の抽出因子及び因子負荷量

Table 1. Rotated factor loadings and naming of factors.

因子番号	抽出因子	因子負荷量
第1因子	精神鍛錬因子	
	v 22 決断力がつく	0.5508
	v 24 積極的になる	0.4279
	v 25 協力的になる	0.6491
	v 26 責任感が強くなる	0.5882
	v 27 礼儀正しくなる	0.6192
	v 28 正義感が強くなる	0.5252
	v 29 気持ちが落ち着くようになる	0.5188
	v 30 人を大事にする気持ちが強くなる	0.7322
	第2因子	否定的感情因子
v 6 暗く陰気な感じがする		0.6333
v 7 孤独な感じがする		0.7907
第3因子	逃避的感情因子①	
	v 9 スリルを感じる	0.6699
	v 10 危険な感じがする	0.5428
第4因子	体力鍛錬因子	
	v 16 力がつく (瞬発力や筋持久力)	0.6920
	v 17 持久力がつく	0.5759
第5因子	肯定的感情因子	
	v 2 楽しい感じがする	0.5844
	v 3 さわやかな感じがする	0.5845
	v 4 はなやかな感じがする	0.6315
第6因子	逃避的感情因子②	
	v 13 痛くてたまらない感じがする	0.8145
	v 14 怖い感じがする	0.6732

1) 態度変容

①得られたデータから因子分析を施し、柔道に対する態度構造を明らかにした。(共通性の推定値を1.0として主因子解による結果から固有値1.0以上である因子を抽出。得られた因子行列に対してVarimax 回転を施し、因子負荷量0.5以上から各因子を解釈した。) ②2回の調査別に、各群の各因子の平均得点を算出した。(因子の得点=因子に含まれる項目の合計得点÷項目数) ③実験群・対照群の各因子平均得点の平均値の差を、t-testにより検定を行った。④実験群・対照群の授業前後の各因子間の平均得点を、対応のあるt-testにより検定を行った。

2) 生徒による授業評価

①各質問項目毎に全ての授業における平均得点を算出し、t-testにより検定を行った。

III. 結果及び考察

1. 学習ノート使用に関して

1) 授業実施前後の態度変容から回転後抽出された因子のうち、

命名可能な因子は表1に示す6因子であった。また、貢献度の合計は全分散の48.5%であった。

(第1因子：精神鍛練因子，第2因子：否定的感情因子，第3因子：逃避的感情因子①，第4因子：体力鍛練因子，第5因子：肯定的感情因子，第6因子：逃避的感情因子②)これらの因子は、高橋ら¹¹⁾が過去において中学生を対象として柔道に対する態度構造を明らかにした研究と、ほぼ同様な結果となった。しかし、肯定的感情因子の「明るい感じがする」という項目が含まれていないことや、逃避的感情因子が2つに分化する等、若干態度構造の未分化性が認められた。そこで、因子の平均得点を算出する際においては、逃避的感情因子の①と②に含まれる項目を統合する等、因子分析の結果に影響がでない範囲で、データの加工を行った。

表2は、各因子の平均得点と授業前後の同一群間での継続的変容に対する有意差検定を示している。実験群・対照群ともに精神鍛練因子では0.1%水準で有意に高い好意的方向への変容を示している。また、同様に肯定的感情因子においても実験群・対照群ともに1%水準で有意に高い好意的方向への変容を示している。さらに、対照群では体力鍛練因子においても5%水準で有意に高い好意的方向への変容を示している。

表3は質問項目ごとの実験群・対照群での授業前後での得点・SDならびに同一群間での継続的変容に対する有意差検定を示したものである。実験群においては7項目で有意な好意的変容が認められた。また、対照群でも9項目で有意な好意的変容が認められた。以上のように、本研究における態度変容の結果からでは、実験群と対照群での態度の各側面には大きな差異は認められなかった。しかしながら、実験群において非好意的な方向への態度変容が起きたというわけでもない。したがって、学習ノート使用の有効性が否定されたわけでもなからう。本研究での授業者の学習マネジメントや学習指導計画の適切性が実験群・対照群ともに好意的態度変容をもたらしたと推察できる。高校生を対象とした研究ではあるが、柔道授業に学習ノートを使用した場合の態度変容について川嶋ら³⁾の研究では、使用の有無による大きな差異は見られなかったが、柔道学習において指導者の専門性が非常に重要であると報告されている。推測の域を脱しないが、授業者の指導経験が乏しいような場合であったら、学習ノートの有効性もより顕著に表れたのではないかと考える。授業者の指導歴等を要因に加えて検討することが、今後の課題とも言えよう。

2) 生徒による授業評価から

表4は、生徒による授業評価の得点と両群間の有意差を表している。課題の困難度以外の項目に関しては得点が高いほど生徒の授業評価はよいものと仮定した。結果を見ると、実験群が対照群に対して有意に高い得点を示した項目はなかった。しかし、統計的には有意差は認められなかったものの、「新しい発見」「課題の困難度」の項目では、実験群における得点の方

表2. 各因子の平均得点と t-test

Table 2. Mean score of each factor and t-Test.

因子	対象	n	授業前 得点・SD	授業後 得点・SD	t-test
精神鍛練因子	対照群	40	2.59±0.50	3.06±0.46	P<0.001
	実験群	40	2.69±0.64	2.99±0.57	P<0.001
否定的感情因子	対照群	40	2.21±0.78	2.34±0.67	
	実験群	40	2.18±0.66	2.22±0.71	
逃避的感情因子	対照群	40	2.68±0.69	2.66±0.49	
	実験群	40	2.63±0.60	2.72±0.52	
体力鍛練因子	対照群	40	2.79±0.66	3.05±0.59	P<0.05
	実験群	40	3.14±0.65	3.19±0.65	
肯定的感情因子	対照群	40	2.35±0.66	2.70±0.47	P<0.01
	実験群	40	2.25±0.49	2.57±0.65	P<0.01

表3. 授業前後における態度得点・SDとt-test

Table 3. Mean score, standard deviation, and t-Test at pre-and post-test (the attitudes towards judo).

質問項目	実験群 (学習ノート使用群)			対照群 (学習ノート未使用群)		
	授業前 得点・SD	授業後 得点・SD	t-test	授業前 得点・SD	授業後 得点・SD	t-test
1 明るい感じがする	2.46±0.67	2.51±0.71		2.42±0.67	2.51±0.74	
2 楽しい感じがする	2.53±0.67	2.82±0.84		2.71±0.79	2.87±0.72	
3 さわやかな感じがする	2.33±0.72	2.64±0.86		2.39±0.84	2.92±0.76	P<0.01
4 はなやかな感じがする	1.87±0.56	2.25±0.74	P<0.05	1.94±0.68	2.41±0.80	P<0.01
5 近代的な感じがする	2.05±0.63	2.10±0.87		2.26±0.67	2.48±0.93	
6 暗く陰気な感じがする	2.20±0.75	2.05±0.67		2.07±0.83	2.33±0.76	
7 孤独な感じがする	2.15±0.73	2.38±0.89		2.34±0.86	2.25±0.83	
8 苦しい感じがする	2.56±0.84	2.66±0.82		2.71±0.85	2.71±0.81	
9 スリルを感じる	2.71±0.84	2.89±0.77		2.86±0.73	2.87±0.85	
10 危険な感じがする	2.89±0.81	2.97±0.73		2.92±0.98	2.92±0.82	
11 日本古来の運動文化として重要に感じる	2.89±0.87	3.12±0.75		3.10±0.75	3.35±0.65	
12 女性の参加に抵抗を感じる	1.94±0.78	2.20±0.82		2.07±0.08	2.15±0.86	
13 痛くてたまらない感じがする	2.53±0.74	2.48±0.71		2.63±0.87	2.46±0.71	
14 怖い感じがする	2.38±0.80	2.51±0.78		2.31±0.76	2.48±0.78	
15 他のスポーツと違うように感じる	2.94±0.84	3.05±0.81		2.94±0.85	3.12±0.72	
16 力がつく (瞬発力や筋持久力)	3.41±0.70	3.23±0.69		3.18±0.72	3.33±0.61	
17 持久力がつく	2.87±0.75	3.15±0.66		2.39±0.77	2.79±0.85	P<0.05
18 体が柔らかくなる	2.71±0.78	3.02±0.76		2.97±0.70	3.05±0.90	
19 運動が素早くなる	3.00±0.81	3.15±0.76		2.97±0.81	3.20±0.64	
20 平衡性が向上する	2.79±0.75	3.12±0.64	P<0.05	2.76±0.74	3.12±0.56	P<0.01
21 明るくなる	2.28±0.74	2.41±0.89		2.31±0.72	2.64±0.83	
22 決断力がつく	2.79±0.91	2.82±0.87		2.65±0.69	2.97±0.86	
23 忍耐力がつく	2.92±0.85	3.07±0.76		2.94±0.68	3.12±0.60	
24 積極的になる	2.94±0.84	3.15±0.80		2.84±0.81	3.12±0.60	
25 協力的になる	2.43±0.84	2.84±0.73	P<0.05	2.23±0.74	2.79±0.82	P<0.01
26 責任感が強くなる	2.38±0.77	2.74±0.77	P<0.05	2.26±0.71	2.89±0.63	P<0.001
27 礼儀正しくなく	3.02±0.83	3.30±0.72		3.05±0.64	3.43±0.54	P<0.01
28 正義感が強くなる	2.58±0.86	2.97±0.80	P<0.05	2.68±0.76	2.97±0.76	
29 気持ちが落ち着くようになる	2.76±0.89	3.12±0.85		2.55±0.90	3.28±0.63	P<0.001
30 人を大事にする気持ちが強くなる	2.51±0.90	2.94±0.81	P<0.05	2.44±0.81	3.00±0.82	P<0.01

が、よい傾向を示した。高橋典衛⁹⁾は、中学校期の体育の指導における書かせることの意義について「認識を深め学習を定着させていく」と報告しているように、「新しい発見」「課題の困難度」の項目から学習ノート使用により、技術的知識が確認され、理解が深まったことを表していると考えられよう。

ところが、学習ノート使用の一番のねらいでもあろう「自主的学習態度」「学習の目当て」の項目に関しては、実験群における得点の方がむしろ低い値を示した。「学習の目当て」をもたせるための効果的役割を十分には果たせなかった原因として、ひとつには今回使用した学習ノートが技術的内容を主としたものであったことが考えられる。さらに本研究では、授業者のやりやすい柔道授業の学習計画を優先させ、それに付随的に学習ノートを使用したという使用方法による問題も考えられる。今回の授業は、学習ノートの学習計画通りに授業を行ったのではなく、授業者が従来行っていた柔道の学習計画にそって授業を進め、その授業内容にあった箇所のページについて学習ノートを使用するといった授業展開であったことが学習の目当てをもたせることに役立たなかったものと推察する。「自主的学習態度」に関しても学習ノートの使用方法が大きく関与して

いるものと思われる。特に、学習ノートに準じた学習計画の立案が重要なことであり、今回実施したような学習ノートの使用方法では、本来学習ノートの持っている有効性を破棄してしまうものと言える。学習ノートは、1時間毎の学習内容と成果を確認でき学習課題が簡単に書けるものでなくてはならない⁵⁾とされているように、1時間毎の使用が大切であろう。そして、授業中に使用することだけに留まらず、授業以外の時間帯において学習できるところにも学習ノートの特徴がある。以上のことから本研究における学習ノートの使用について考察すると、今回行った学習ノート使用の柔道授業では、学習ノートの持つ有効性を十分に発揮できない授業展開であったことが推察できる。今後、学習ノートの記入時間・記入量などの使用方法に関する分析検討が必要と思われる。

次に、学習内容として基本動作である受け身（後ろ受け身・横受け身）を主に学習した1～4限までと、対人的技能を主に学習した5～11限までの生徒の授業評価についてみたものが表5・6である。受け身を主に学習した1～4限では「新しい発見」に関する授業評価に関し、実験群の方が1%水準で高い得点を示し、この項目に関しては学習ノート使用による有効性が窺われた。また、各授業評価の実験群と対照群の有意差をみるt値を表6と表5で比較する

表4. 生徒による授業評価の得点とt-test (全授業1～14限)
Table 4. The assesment score of the judo class by the students, and t-Test (from 1st period to 14th period).

授業評価	対象	実験群	対照群	t値
精一杯の運動		3.49±0.67	3.49±0.67	-0.01
技や力の伸び		3.29±0.73	3.32±0.67	-0.75
新しい発見		3.38±0.72	3.30±0.69	1.74
仲間関係		3.32±0.73	3.31±0.72	0.30
楽しさ		3.40±0.72	3.40±0.67	0.11
学習の目当て		3.05±0.83	3.16±0.75	-2.24*
自主的態度		3.07±0.85	3.21±0.69	-2.97**
課題の困難度		2.88±0.93	3.00±0.88	-1.92
準備・片付け		3.06±0.81	3.03±0.82	0.56

*P<0.05 **P<0.01

表5. 生徒による授業評価の得点とt-test (受け身の1～4限)
Table 5. The assesment score of the judo class by the students, and t-Test (from 1st period to 4th period).

授業評価	対象	実験群	対照群	t値
精一杯の運動		3.49±0.60	3.50±0.56	-0.10
技や力の伸び		3.13±0.73	3.23±0.65	-1.37
新しい発見		3.43±0.66	3.20±0.67	2.84**
仲間関係		3.29±0.66	3.18±0.74	1.39
楽しさ		3.48±0.62	3.38±0.67	1.34
学習の目当て		2.95±0.79	2.96±0.84	-0.06
自主的態度		2.99±0.84	3.07±0.67	-0.95
課題の困難度		2.73±0.97	2.83±0.85	-0.92
準備・片付け		2.96±0.82	2.92±0.84	0.40

*P<0.05 **P<0.01

表6. 生徒による授業評価の得点とt-test (対人的技能の5～11限)
Table 6. The assesment score of the judo class by the students, and t-Test (from 5th period to 11th period).

授業評価	対象	実験群	対照群	t値
精一杯の運動		3.47±0.69	3.52±0.63	-0.74
技や力の伸び		3.33±0.70	3.33±0.69	-0.09
新しい発見		3.38±0.72	3.30±0.72	1.18
仲間関係		3.32±0.74	3.32±0.71	-0.11
楽しさ		3.37±0.73	3.42±0.67	-0.82
学習の目当て		3.09±0.86	3.23±0.70	-1.99*
自主的態度		3.10±0.86	3.24±0.66	-2.08*
課題の困難度		3.01±0.89	3.03±0.86	-0.29
準備・片付け		3.08±0.83	3.07±0.79	0.26

*P<0.05 **P<0.01

と、若干ではあるが表5の受け身を主に学習した時限の方が大きな値を示している。つまり、受け身を主に学習した授業においての方が対人的技能を主に学習した授業より、学習ノート使用の有効性が僅かながら見られる。前述したように本研究での学習ノートの使用方法には、問題点があったと思われるが、それにもかかわらずどちらかと言えば興味を持たせにくい基本動作という学習内容を、学習ノートを使用することで学習者の動機づけを高めることができたものと思われる。そして、学習ノートで授業のフィードバックをすることでさらに技術的認識が深まり「新しい発見」に対する授業評価での有効性を示したものと考察する。さらに、1～4限の授業では、5～11限に比較すれば学習ノート使用頻度も多く、学習ノート使用の効果が生じたものと思われる。このことは、学習ノートを有効に使用すれば中学校の柔道授業において、その学習効果が期待できることを示唆していると言えよう。

2. 男女共習授業に関して

1) 男女共習に関する生徒の希望について

表7は男女共習に関する生徒の希望を示したものである。学習開始時では、男女共習の体育授業について男子で27%、女子で15%が男女別を希望していた。1学期間の体育授業終了後では、男女別希望者も男子で15.8%、女子で7.5%に減少している。つまり、男女共習での体育授業が無理なく実施されていることが窺える。しかしながら、そのように男女共習授業で順調に学習してきた生徒においても柔道に関しては、男子で39.5%、女子で15%の生徒が男女別がいいと答えている。このように、柔道は体育の教材の中でもやはり他のスポーツ種目より男女共習にやや抵抗を感じていることがわかる。高等学校女子生徒における向井ら⁹⁾の報告では、女子で63.3%が男子で43.2%が男女別での柔道授業を希望しているという。その結果と比較すれば、男女共習を実施するならば中学生段階の方が無理がないと言えよう。但し、他の種目よりも抵抗を感じていながらもあえて、柔道を男女共習で行うとするならば男女共習による柔道授業からなにを学習させるのかという教科内容研究の課題を克服しなければならない。

2) 柔道に対する女子中学生の態度変容について

女子中学生がどのように柔道をとらえているかについて考えていきたいと思う。表8は、女子生徒の柔道に対する態度変容について1987年の女子中学生のデータ¹⁷⁾と比較して統計的に有意に

表7. 男女共習に関する生徒の希望

Table 7. The motivation of students in the coeducational classes.

質問内容	回答	男子	女子	全体
1) 体育を男女共習で学習することについてどう感じているか	男女別がいい	27.0(10)	15.0(6)	20.8(16)
	男女共習がいい	0.0(0)	20.0(8)	10.4(8)
	何とも思わない	73.0(27)	65.0(26)	68.8(53)
2) 1学期間、体育を男女共習で学習してきたかどう感じているか	男女別がいい	15.8(6)	7.5(3)	11.5(9)
	男女共習がいい	13.2(5)	30.0(12)	19.2(15)
	何とも思わない	71.1(27)	62.5(25)	66.7(52)
3) 男女共習で柔道を学習することについてどう感じているか	男女別がいい	39.5(15)	15.0(6)	26.9(21)
	男女共習がいい	7.9(3)	30.0(12)	19.2(15)
	何とも思わない	52.6(20)	55.0(22)	53.8(42)

% (人数) を表す

行為の変容が認められた質問項目である。1992年バルセロナオリンピックでの日本女子柔道選手の活躍や柔道漫画の女性主人公の影響もあってか、柔道に対するイメージは好意的方向に変容していることが認められる。v1～v4の明るい・楽しい・爽やか・華やかといった肯定的感情に関する質問に対する得点は、全て0.1または1%水準で有意に高い得点を示し、イメージの改善がみられる。またv6・v7やv13の暗い・孤独・痛いなどといった否定的感情に関しては有意に低い得点を示し、柔道に対する態度はとても好意的になっているといえよう。そして、「v12女性の参加に抵抗を感じる」という質問に対しても5%水準で有意に好意的変容がみられ、女性が柔道を行うことに抵抗を感じなくなってきたことがわかる。これまでの一連の研究では、柔道に対する感情は、否定的・逃避的傾向にあることが問題とされていたが、今回の対象においてはそのような現象は見られなく、好意的感情を持っていた。つまり、中学生の女子において柔道授業を実施することの妥当性を表していると言えよう。

3) 男女共習授業実施前後の態度変容から

表9は各質問項目ごとの男子・女子および全体での授業前後での得点・SDならびにそれぞれの継続的変容に対する有意差検定を示したものである。全体では、男女共習授業前後での態度変容に関して、統計的に有意に好意的変容を示した項目は、9項目であった。「v25協力的になる」0.1%水準、「v21明るくなる」「v30人を大事にする気持ちが強くなる」1%水準でそれぞれ大きな好意的変容が認められ、v11・v17・v20・v23・v26・v28でも5%水準で有意に高い好意的変容を示した。それ以外の項目では統計的に有意な差は認められなかったものの好意的変容を示していることから、中学校での共習授業の可能性が窺えた。

男子についてみるとv1～v5までの明るい・楽しい・さわやかななどの肯定的感情での得点は共習授業後高くなっている。v6～v8の暗い・孤独・苦しいといった逃避的・否定的感情は授業後低くなっている。つまり、好意的な変化を示していることがわかる。また、身体・精神的効果に関しては多くの項目で有意に高く変化していることから共習授業でも十分に授業効果があると言えよう。但し、ここでひとつ問題になることがある。それは「v12女性の参加に抵抗を感じる」という質問に対する男子の回答である。授業前2.38から授業後2.50と統計的に有意差は認められないが、やや得点は高くなっている。つまり、柔道授業を女子と一緒に実施したにもかかわらず女性の参加に抵抗を感じるという項目での改善は見られなかった。対象としたW中学校の得意なケースとも考えられるが、共習授業では女性に対する配慮は勿論であるが、男子に対する配慮の必要性も窺える。

女子に関しては、明るい・楽しい・爽やかななどの肯定的感情の項目では授業前からその得点が高いこともあり授業後も好意的方向への変化は、ほとんどみられていないのがきになるところである。しかし、「v25協力的になる」1%水準、「v30の人を大事にするようになる」という項目

表8. 女子生徒における態度変容—1987年と比較して—
Table 8. The changing attitudes of girl subjects.

0.1%水準で有意な好意的変容をした項目
v2 楽しい感じがする
v4 はなやかな感じがする
v6 暗く陰気な感じがする
v9 スリルを感じる
1%水準で有意な好意的変容をした項目
v1 明るい感じがする
v3 さわやかな感じがする
v13 痛くてたまらない感じがする
v16 力がつく
5%水準で有意な好意的変容をした項目
v7 孤独な感じがする
v12 女性の参加に抵抗を感じる
v19 運動が素早くなる
v29 気持ちが落ち着くようになる

表9. 男女共習授業における授業前後の態度得点・SDとt-test

Table 9. Mean score, standard deviation, and t-Test under pre-and post-test (the attitudes towards judo in the coeducational classes).

質問項目	全 体			男 子			女 子		
	授業前 得点・SD	授業後 得点・SD	t-test	授業前 得点・SD	授業後 得点・SD	t-test	授業前 得点・SD	授業後 得点・SD	t-test
1 明るい感じかする	2.42±0.79	2.63±0.73		2.38±0.80	2.73±0.77		2.45±0.77	2.53±0.67	
2 楽しい感じかする	2.79±0.79	2.84±0.80		2.74±0.78	2.95±0.80		2.85±0.79	2.73±0.77	
3 さわやかな感じかする	2.67±0.77	2.78±0.79		2.62±0.80	2.95±0.80		2.73±0.74	2.60±0.73	
4 はなやかな感じかする	2.23±0.69	2.24±0.68		2.26±0.78	2.33±0.69		2.20±0.60	2.15±0.65	
5 近代的な感じかする	2.11±0.73	2.31±0.73		2.18±0.81	2.33±0.75		2.05±0.63	2.30±0.71	
6 暗く陰気な感じかする	2.08±0.85	1.96±0.73		2.23±0.89	2.10±0.77		1.93±0.79	1.83±0.67	
7 孤独な感じかする	2.18±0.89	2.08±0.74		2.32±0.83	2.23±0.65		2.05±0.92	1.93±0.79	
8 苦しい感じかする	2.70±0.88	2.56±0.81		2.74±0.93	2.62±0.87		2.65±0.82	2.50±0.74	
9 スリルを感じる	2.90±0.71	2.83±0.75		2.97±0.67	2.88±0.78		2.83±0.74	2.78±0.72	
10 危険な感じかする	2.76±0.81	2.60±0.80		2.72±0.88	2.58±0.70		2.80±0.75	2.63±0.89	
11 日本古来の運動文化として重要に感じる	2.99±0.86	3.30±0.76	P<0.05	2.95±0.90	3.38±0.62	P<0.05	3.03±0.82	3.23±0.88	
12 女性の参加に抵抗を感じる	2.17±0.87	2.21±0.83		2.38±0.89	2.50±0.84		1.95±0.78	1.93±0.72	
13 痛くてたまらない感じがする	2.42±0.87	2.18±0.78		2.59±0.84	2.25±0.77		2.23±0.86	2.10±0.78	
14 悔い感じがする	2.43±0.87	2.20±0.78		2.54±0.84	2.13±0.75	P<0.05	2.33±0.88	2.28±0.81	
15 他のスポーツと違うように感じる	2.96±0.83	3.05±0.86		3.15±0.86	3.18±0.89		2.78±0.76	2.93±0.82	
16 力がつく(瞬発力や筋持久力)	3.10±0.87	3.11±0.73		3.15±0.89	3.28±0.68		3.05±0.84	2.95±0.74	
17 持久力がつく	2.66±0.83	2.92±0.79	P<0.05	2.72±0.88	3.05±0.81		2.60±0.77	2.80±0.75	
18 体が柔らかくなる	2.92±0.79	3.03±0.84		3.03±0.80	3.15±0.83		2.83±0.77	2.90±0.83	
19 運動が素早くなる	2.90±0.84	3.03±0.82		3.00±0.82	3.21±0.80		2.80±0.84	2.85±0.79	
20 平衡性が向上する	2.81±0.73	3.09±0.70	P<0.05	3.03±0.70	3.34±0.53	P<0.05	2.60±0.70	2.85±0.76	
21 明るくなる	2.30±0.72	2.63±0.70	P<0.01	2.26±0.78	2.75±0.70	P<0.01	2.35±0.65	2.50±0.67	
22 決断力がつく	2.82±0.78	2.95±0.77		2.90±0.63	3.05±0.67		2.75±0.89	2.85±0.85	
23 忍耐力がつく	2.81±0.73	3.08±0.73	P<0.05	2.87±0.65	3.36±0.58	P<0.01	2.75±0.80	2.80±0.75	
24 積極的になる	2.85±0.75	3.03±0.74		2.92±0.73	3.30±0.60	P<0.05	2.78±0.76	2.75±0.77	
25 臨機的になる	2.44±0.74	3.00±0.72	P<0.001	2.59±0.81	3.18±0.70	P<0.01	2.30±0.64	2.83±0.70	P<0.01
26 責任感が強くなる	2.66±0.76	2.98±0.84	P<0.05	2.90±0.71	3.20±0.71		2.43±0.74	2.75±0.89	
27 礼儀正しくなる	3.13±0.83	3.30±0.70		3.31±0.76	3.45±0.59		2.95±0.86	3.15±0.76	
28 正義感が強くなる	2.75±0.83	3.04±0.73	P<0.05	2.82±0.78	3.18±0.67	P<0.05	2.68±0.88	2.90±0.77	
29 気持ち落ち着くようになる	3.03±0.83	3.05±0.77		3.00±0.86	3.25±0.66		3.05±0.67	2.85±0.82	
30 人を大事にする気持ちが強くなる	2.58±0.82	2.98±0.82	P<0.01	2.79±0.88	3.00±0.89		2.38±0.70	2.95±0.74	P<0.001

に関し0.1%水準で有意に高くなっており男女共習の授業で一番ねらいとする結果と言えよう。またその他の項目に関しても統計的に有意差はなかったものの好意的方向に変容していたことから、女子においても共習授業の可能性があらう。

表10は、共習群男子と別習群での授業後の態度得点で2群間で有意差が認められた質問項目の一覧である。6つの項目で5%水準で統計的に有意に共習群の方が柔道を好意的に捉えている結果であり、特に、逃避的な危険・怖いという感情の変容には有効性が伺えよう。またその他の項目でも僅かではあるものの共習群での授業の方が好意的に柔道を捉えていた。しかし、「v12女性の参加に抵抗を感じる」という質問に対しては別習群よりも統計的に有意に高い値であり、抵抗を感じている結果であった。山村の小規模校などでは、男女共習での柔道授業を取り入れ、しかも男女で組み合っの柔道授業を実施している学校もあると聞き、実際の経験により改善できると考えていた。しかし、中途半端な共習授業形態ではこの問題は改善できず、男子においては女子の参加を自然に受け入れられる授業初期の導入部での工夫・改善の必要性があらう。

4) 男女共習授業の生徒による授業評価から

表11は、生徒による授業評価の得点と各群間での有意差を示したものである。男女共習では、男女間での運動能力差から生じる男子の運動欲求不満が大きな問題とされている。しかし、「精一杯運動することができましたか」という精一杯の運動の授業評価項目ではかえって共習群の方が5%水準で有意に高く、よい結果を示している。また楽しさに関しても共習群の方が5%水準で

有意に高い値を示した。その他の項目でも共習群の方が良い傾向にあり共習授業の男子に対する有効性が窺える。しかし、女子における授業評価を見ると共習群男子に比較しほとんどの項目で有意に低い値であり、女子における共習授業の問題点が残った。但し、その授業評価は男子に比較し低いだけでありマイナスの評価にはなっていない。とはいうものの男女間に有意差が生じていることは確かであり、前述の意識の変化も男子に比較し好意的変化は少なく、今回実施した授業が女子にとってはどこか問題があったのではないか。今回実施した共習授業は、今まで男子だけのクラスで実施していた内容を男女共習で行ったというものであり、女子中学生の特性にあった柔道授業の検討の必要性を感じる。

男女共習による柔道授業は、他のスポーツ種目に比べ男女で実施することに対してほんのわずかながら抵抗を感じてはいるものの、実施に際し支障をきたすほどではなかった。また、柔道に対する意識・生徒による授業評価からは、男女共習による大きな問題点はなく、男女共習でも中学校1年生では柔道授業を実施できることを示唆していると言える。しかし、共習授業とは男女という性差にともない当然のことながら極端な能力差が生じるクラスでもある。そのため、授業の進み具合も遅く、今回の共習授業でも別習群と比較し技能面での学習内容は少なかった。このように、技能を高めるという観点からだけならば共習授業は、非効率的になる可能性が高くなるだろう。すなわち、中学校の体育における柔道授業からなにを学習させるのかという教科内容研究の課題がここでも重要な意味を持って来る。

IV. 結論

中学校1年生の初心者を対象とする基本的な柔道授業において、学習ノート使用の有無・男女共習授業という指導方法のもとに一定期間授業を実施した。そして、その授業前後の柔道に対す

表10. 共習群と別習群の授業後の態度得点
で有意差が認められた質問項目

Table 10. The items of significance within five percent at post-test, comparing the coeducational class with the boy's class.

共習群<別習群	
v 10	危険な感じがする
v 14	怖い感じがする
共習群>別習群	
v 12	女性の参加に抵抗を感じる
v 20	平衡性が向上する
v 23	忍耐力がつく
v 25	協力的になる
v 26	責任感が強くなる

表11. 生徒による授業評価の得点と t-test

Table 11. The assesment score of judo classes by the students, and t-Test.

対象 授業評価	別習群 (男子)	共習群 (男子)	共習群 (女子)	別習群共習 群男子の t-test	共習群男女 間での t-test
精一杯の運動	3.49±0.67	3.62±0.57	3.32±0.69	p<0.05	p<0.001
技や力の伸び	3.32±0.67	3.33±0.65	2.95±0.71		p<0.001
新しい発見	3.30±0.69	3.30±0.74	3.05±0.71		p<0.001
仲間関係	3.31±0.72	3.32±0.64	3.15±0.68		p<0.05
楽しさ	3.40±0.67	3.52±0.61	3.25±0.73	p<0.05	p<0.001
学習の目当て	3.16±0.75	3.10±0.77	2.80±0.75		p<0.001
自主的態度	3.21±0.69	3.26±0.70	2.92±0.71		p<0.001
課題の困難度	3.00±0.88	2.95±0.89	2.84±0.86		
準備・片付け	3.03±0.82	3.11±0.75	3.20±0.67		p<0.05

る態度変容ならびに毎時間の生徒の授業評価から、中学校の柔道授業における学習ノート使用の効果・男女共習授業の可能性について分析検討した。その結果を要約すると以下の如くである。

- 1) 学習ノートの使用の有無にかかわらず、学習者にとって有効と思われる学習内容を教授することこそが、その後の学習に対する態度を好意的な方向に変容させる要因であることが示唆された。
- 2) 生徒の授業評価から、有効に学習ノートを使用すれば、「わかる」という技術認識を深めることを助長できる方法であることの示唆を得られた。
- 3) 共習群と別習群での態度変容・授業評価という観点からは、共習授業での男子生徒における有効性が認められた。
- 4) 中学校1年生の柔道授業における男女共習の可能性が確認されたが、それとともに中学校の柔道授業でなにを学習させるのかという教科内容研究の課題が残った。

参考文献

- 1) 藤田幸康・西塚春義「高校におけるケーススタディー柔道・剣道における男女共習」体育科教育, 1994-3: 48-52.
- 2) 学校体育研究同志会編著, 体育実践に新しい風を, 大修館書店, 1993. Pp. 260.
- 3) 川嶋直司・佐藤幸夫・筒井隆夫他「学習ノート使用の有無による柔道学習者の意識変容の差異について—高校生の場合—」武道学研究, 22-2: 165-166, 1989.
- 4) 北尾倫彦, 自己教育力を考える, 日本図書文化協会, p116-p123, 1987.
- 5) 松田岩男(監), 体育・スポーツ教育実践講座16「発達に応じたカリキュラム・教材・用具等の開発」体育スポーツ教育実践講座刊行会, 1992. Pp. 243.
- 6) 向井幹博他「体育授業への女子柔道導入に関する研究—高校生を対象として—」柔道, 64-12: 82-86, 1993.
- 7) 沼田 仁「武道推進指定校リポート 自ら学び活動する」武道, 1993-6: 58-64.
- 8) 永山和彦「中学校教科体育における柔道指導について—生徒が主体的に取り組む柔道の指導—」柔道, 64-3: 92-96, 1993.
- 9) 高田典衛, 実践による体育授業研究, 大修館書店, 172-189, 1979.
- 10) 高橋健司「中学校教科体育における柔道指導について—生徒が主体的に活動できる柔道指導の工夫—」柔道, 63-2: 52-57, 1992.
- 11) 高橋 進・矢野 勝「柔道に対する中学生の態度構造について」関東学園大学紀要, 14: 137-144, 1988.
- 12) 高橋 進・矢野 勝・磯村元信「柔道に対する女子高校生の態度構造について—男子高校生との比較から—」関東学園大学紀要, 16: 109-115, 1990.
- 13) 高橋 進・貝瀬輝夫・矢野 勝他「大学生と高校生の柔道に対する態度の差異について—認知的側面と感情的側面の比較—」武道学研究, 22-1: 33-44, 1989.
- 14) 高橋健夫・岡沢祥訓・中井隆司他「体育授業における教師行動に関する研究—教師行動の構造と児童の授業評価との関係—」体育学研究, 36: 193-208, 1991.
- 15) 辻野 昭・川島俊明・梅野圭史他「スポーツ教育における学力とその形成に関する一考察—教授活動の相違が児童の授業に対する態度に及ぼす影響について—」スポーツ教育学研究, Vol. 1: 13-28, 1982.
- 16) 辻野 昭, 「スポーツの科学的認識を育てる」丹羽劭昭(編), スポーツと教育, 第一法規出版, 1984. pp172-178.
- 17) 矢野 勝・高橋 進「柔道に対する一般女性の意識構造について」和歌山大学教育学部紀要, 38: 29-37, 1989.